5/11 赤旗

ネカフェ生活ぜんそくに

壊される非正規

新型コロナと氷河期世代

北岡保さん（40歳、仮名）は現在、東京都が借り上げたビジネスホテルに仮住まいしています。新型コロナウイルス感染症の影響で収入が激減したうえ、寝泊まりしていた都内のネットカフェが都の要請に応じて営業を停止したからです。

1998年に高校卒業後、地元で溶接工として働いていた北岡さん。知人の借金を肩代わりさせられたことをきっかけに3年前に東京に出て、ネットカフェで暮らしながら主に工事現場で働くようになりました。

「生まれて初めて派遣で働いた。仕事は職人たちが『雑工』と呼ぶ、工事で出たがれきの撤去や砂利やセメントの搬送。溶接工時代は自分もばかにしていたが、やってみて大変さを実感した」

仕事がない日が続くと途端に生活が行き詰まるため、体調がいいときは無理をしてでも働きます。

「午前8時から夕方5時まで働いた後、次の現場に近いネットカフェに移動して数時間仮眠。深夜11時から午前5時まで働き、再び午前8時の仕事に向かう。横になると寝過ごすので朝の睡眠は電車の中」

肉体労働で鍛えられたがっしりとした体格。それでも、疲れがたまると歩きながら意識が飛んだり、突然膝が落ちたりし、2～3日続けると胸が苦しくなるといいます。15時間働いて1日の収入は1万7千～1万8千円。ネットカフェ代や食費、現場までの交通費などで1日6千円は確実にかかります。

当初は、少し落ち着いたら正規雇用の仕事に就きたいと思っていました。しかし、しばらくするとぜんそくが出るようになり、発作が起こると苦しさで頭が真っ白に。ためらいが生じました。

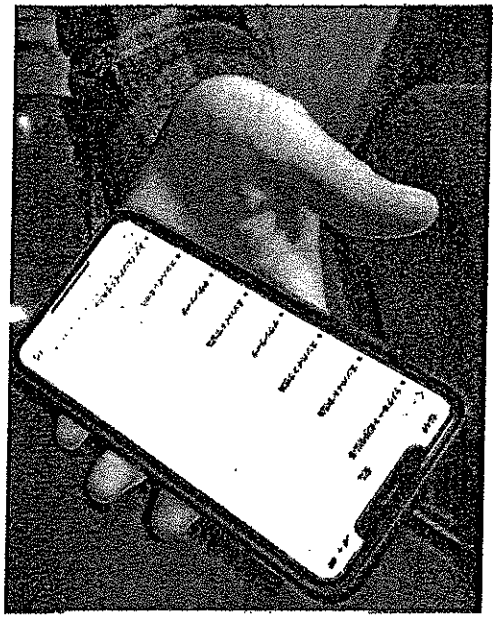
「発作が出ても派遣なら1日前までなら休める」

健康保険証がないため医療費は10割負担。初めて病院にかかったときは検査などで5万円が飛びました。派遣で必死にためたお金はあっという間に消えていきました。

昨年、「就職氷河期世代」の就労支援を打ち出した安倍政権は、1990年代初頭のバブル経済崩壊後に学校卒業期を迎えた世代を「就職氷河期世代」と定義。不本意に非正規で働く人が少なくとも50万人いると推計しました。一方、非正規を広げた反省はなく、さらなる拡大を目指します。

新型コロナが社会を覆うもと非正規で働いてきた人々のいまを追います。

（2面につづく）



常に5～6社の派遣会社に登録しているが、最近はほとんど仕事がこない（画像の一部を加工）